

江戸時代後期上方における鼠飼育と奇品の産出 —『養鼠玉のかけはし』を中心に—

安 田 容 子

要旨

18 世紀後半の大坂では、奇品と呼ばれる毛色の変った鼠が個人の鼠飼育愛好家「養鼠家」により盛んに作り出され、鼠飼育の入門書である『養鼠玉のかけはし』が刊行された。本書は、マウスとラットの飼育書であり、主にラットを愛玩の対象としていると考えられた。また本書は、『珍玩鼠育草』にも影響を与えた飼育書であったが、奇品の産出に関する考え方は異なっており、奇品の人為的作出に力点がある後者に対して、前者はそれに否定的であった。本書の制作には、三書肆かわり、飼育書でありながら、狂歌絵本の要素も有した特徴的な書物であった。さらに、大坂の狂歌師、一本亭芙蓉花とその門人たちと「養鼠家」との交流が示されていた。

【キーワード： 江戸時代、鼠飼育、『養鼠玉のかけはし』、奇品、上方、狂歌】

1. はじめに

日本では、古代より小鳥などの小動物が飼育愛玩されていた¹。江戸時代になると、小鳥や金魚などの小動物を飼育愛玩することが一般に広がり、様々な種類の動物の飼育書も数多く刊行されていた²。また、18 世紀後半から 19 世紀にかけては、園芸植物の流行の中で、特に奇品と呼ばれる様々な矮小、奇形の植物がもてはやされ、高額で取引されていた³。さらに、19 世紀においては、園芸愛好家だけでなく、狂歌師もまた、その流行を支えていたといわれる⁴。そのような奇品の流行の一つとして、18 世紀後半には鼠の飼育が流行し、斑や月輪などの毛色の変った鼠がもてはやされていた時期があった。現在はハツカネズミを改良したマウスとドブネズミを改良したラットが飼育愛玩の対象となっている。毛色の変化したラットを飼育愛玩することは、19 世紀後半のイギリスにおいて、ドブネズミを改良したファンシーラットの愛好に始まるといわれている⁵。一方でマウスの愛玩について

は、現在愛玩されているマウスのなかに、白黒の斑模様のマウスが存在するが、これは遺伝的に日本産のハツカネズミ由来であることが明らかとなっており、この斑マウスは江戸時代の鼠飼育流行の時期に作り出され、愛玩されていた斑鼠の子孫であるといわれている⁶。

江戸時代における、鼠飼育については、18世紀後半に2種類の飼育書が刊行されている。天明7年（1787）に京都の板元銭屋長兵衛から出版された『珍翫鼠育草』⁷は、白鼠の飼育書であり、メンデルに先駆けた突然変異体（斑鼠）の交雑実験の記録として多数の注目を集めており、交配による突然変異体の出現についての記述への解釈が行われている⁸。しかし、それ以前の安永4年（1775）に出版された鼠の飼育書『養鼠玉のかけはし』⁹はまだあまり注目されていない飼育書である¹⁰。

本論文では、鼠飼育の流行した18世紀後半に、飼育書の刊行された上方において、鼠飼育の流行と奇品が産出された実態について、飼育書である『養鼠玉のかけはし』を読み解くことで明らかにすることを目的とする。

2. 白鼠飼育の流行

2-1. 白鼠と大黒信仰

江戸時代には、『百姓囊』（西川如見、享保6年[1721]序、）巻五に「白鼠有家は。かならず富貴の相なりといひつたふ。¹¹」とあるように、家に出現した白い鼠は富貴をもたらすものであるという俗信があった¹²。台所に大黒天をまつたり、甲子の日に大黒天を祭る甲子祭を行ったりするなどの大黒天に対する信仰が江戸時代中期以降盛んに行われていた¹³。大和郡山藩二代藩主であった柳沢信鴻（1724-1792）が、隠居後の安永2年（1773）から天明4年（1784）にかけて記した『宴遊日記』¹⁴において、甲子の日や、月の初めの日の日には、「子の神を祭る」という記事があることから、甲子祭は18世紀後半以降には広く知られた行為であったといえる。

鼠と大黒天との間には「大黒＝北方の神→十二支の子の神→鼠」の連想があり、鼠は大黒天の使いとして、富貴をもたらす存在として尊ばれていた¹⁵。喜多村信節の『嬉遊笑覧』（天保元年[1830]）巻十二上には「番頭の白鼠とは、大黒は黒をもて北方の色とし、北方子の位なれば鼠を使者とす。番頭利にかしこければ主人富。主人は大黒、番頭は鼠の如し。白鼠といふは白色に瑞物多ければ也。¹⁶」とある。主人によく仕える忠実な人物を白鼠と呼んで珍重することの理由として、「大黒＝北方の神→十二支の子→鼠」の連想をあげて、

大黒と白鼠の関係に擬えている。また、大坂に住んでいた日和佐玉英は『鼠』¹⁷（明和 7 年[1770]書）において、鼠は大黒神の使いであり、大黒神を信仰し、鼠は家を護る神獣と心得て朝夕に愛育すれば、家に災害が生ずることがないと述べている。大黒天を信仰する中で、大黒天の使いである鼠を、富貴をもたらす物として尊ぶようになっていったのである。飼育書である『養鼠玉のかけはし』には

大黒尊天のつかひとして。福德をいのるにも。子の目をまつりて。祥をくたす事多し。十二支には第一におよびふせられ。甲子とつらなりては。六十一年のわかへりに。御代のつきせざるをたのしましめ。北の方をつかさどりて。陰に位し。陰徳陽報の理をしめし。子をうむ事多くして。子孫のたへざるをもて。孝をすすめ。もとより。よはひ久しくして。老てますますすこやかなり。

として、大黒天の使いであることや、十二支の最初であることなどをあげて鼠を福德のある物として見なしている。さらに子を沢山産むことが子孫繁栄に繋がり、さらに、鼠が長寿であるとして、このことも福に繋がるとしている。

また、「白鼠を。福慶のものとするも。子は北方。水なり。白きは西方の色にして金なり。水よく金を生ずるの義を以ていわふなるへし。」と述べ、白鼠の色が金気であることから、鼠の繁殖力と、金が増えることを掛けて、白鼠を大切にすることが金を家にもたらしことであるとしている。明和年間後半には、大黒天の使いとして白鼠を愛玩飼育することがもてはやされる中で、白色であることや、白鼠の繁殖力などもあわせて富貴をもたらすものとしてもてはやされるようになったといえる。

2-2. 白鼠の流行

『武江年表』の明和年間記事に、白鼠の飼育が明和年間（1764-1772）以降に上方を中心に広がっていったという記述がある。また、同じ時期に、上方において白鼠が普及する中で斑などの様々な毛色の鼠が登場していることが当時の随筆などの記録からみてとれる。

明和から安永の間に、大坂城代の家臣として江戸から来た池田正樹が、明和 6 年（1769）から安永 3 年（1774）12 月までの間の大坂での出来事や風俗などを書き記した『難波噺』に、大坂に白鼠が多いことが記されている。前篇卷之三、明和八年十二月廿日の記事に、「当地に白鼠多し。或人云。常の鼠に地鼠を合すれば白鼠を生ずるよしいへり。またとらふ紫其外種々の毛色を生ずるも、ミなつくりたるものなりと。然れども予いまだ其実を知らず。¹⁸」とあり、また後篇卷之三、安永 2 年（1773）における江戸と比較した大坂の風

俗についての記事には「一 多くあるものハ、¹⁹⁾」のなかに白鼠があげられている。18世紀後半の江戸ではまだ一般的ではなかった白鼠が大坂では非常に多く見かけることのできる存在であり、様々な毛色の鼠が大坂の人々の手によって作り出されていたことがわかる。

また、京都の暦算家である西村遠里（1717?-1787）が、晩年の安永年間（1772-1781）中頃における世情についての意見を記した随筆集『居行子後篇』（安永5年[1776]跋、安永8年[1779]刊）では、巻四「白鼠の辨」において、当時の白鼠流行について次のように批判している。

近ごろより世上に白鼠の沢山なる事常の鼠に殊なる事なし。そのみならず熊鼠と名付毛色真黒にしてその上品は咽喉の下に月の輪白くあり。又は黒白の斑なるあり。白鼠はもはや珍しからず。値も下直になり家ごとに小児のなぐさみものとなり。大黒天のつかはしめとたつとぶ人もなし。もと黒白の鼠は希にありしものなるを。世上の人何に付ても奇物を好めづらしきものを翫ぶによりその筋巧者の人々方々と其種を尋出し雌雄を交合てこれをふやし。黒白の鼠を交合て斑の鼠を生ぜしむるやうになりて近來のごとく沢山に成きたれるなり。これ人作を以て造化の功を奪といふものなり。²⁰⁾

安永年間（1772-1781）中頃には、白鼠の入手が容易となり、白鼠の稀少性は失われた一方で、白鼠を飼育し様々に交配させることで斑鼠などの変わった毛色の鼠を作り出すことが愛好家達の中でもてはやされるようになり、珍しいものとしての興味は斑鼠など当時新しく産出された品種へと移っていったことが批判されている。白鼠が普及することで、白鼠の飼育愛玩が人々の中に広がり、奇品に注目が集まっていった時期に出版された鼠の飼育書が、『養鼠玉のかけはし』であった。

3. 鼠の飼育書と奇品

3-1. 『養鼠玉のかけはし』の制作者

『養鼠玉のかけはし』は、二巻二冊の半紙本の書物であり、奥付には、安永4年（1775）正月の発行である。また板元として、江戸の山崎金兵衛、大坂の荒木佐兵衛、辻文助の三書肆が記載されている。この三書肆は、それぞれ山金堂（山崎金兵衛）、柏原屋（荒木佐兵衛）、和泉屋（辻文助）である。また、本書は安永3年（1773）4月に大坂の板元、和泉屋文助から開板願いが出願され、5月に許可されている²¹⁾。また、江戸の「割印帳」においては、安永4年（1774）の正月に「養鼠訣」の題で、作者は観我生²²⁾、板元が山崎金兵衛、

売り出しが柏原屋佐兵衛となっている²³。本書は、序文の題が「養鼠訣序」となっており、上巻の柱刻は「養鼠訣上」となっていることから、鼠を育てるための秘訣の書として制作されたことがわかる。

本書の作者は、奥付に「浪華 春帆堂主人」とあるが、『願出印形帳』には「松原町 春木幸次」とあることから、大坂島之内の松原町在住の春木幸次という人物であると判断できる²⁴。

本書の制作にかかわった絵師、彫師は共に当時の大坂で活躍していた人物であるという特徴を持っている。挿絵を描いている絵師は奥付に「画工 皎天齋主人」とあることから、皎天齋の号を用いていた大坂狩野派の絵師、橘国雄である。橘国雄は、粉本など絵本挿絵を中心に描いていた橘守国の弟子であり、宝暦年間から天明5年まで(1756-1785)の間に絵本挿絵を中心に活躍していた人物である²⁵といわれている。さらに、橘国雄は、安永9年(1780)から天明5年(1785)の間には本書の開板を行った和泉屋(辻文助)から絵本を多数出版していることから和泉屋の専属絵師であったといわれる人物である²⁶。

また、彫師の一人である藤村善右衛門は当時出版された狂歌絵本や往来物の彫刻を行っていた人物である。絵本においては享保2年(1717)から明和8年(1771)まで活躍しており、大坂を代表する彫師として、優れた技術と確かな実績を誇る人物であった²⁷。絵本以外にも往来物の彫刻も多数手がけており、当時の大坂では代表的な彫師であった。

さらに、本書は、当時盛んに作られるようになった絵入りの俳書や狂歌集と同様に、本書上巻に挿入された見開きの挿絵の一部は、挿絵の上の雲形に狂歌が添えられている。挿絵に雲形を挿入する形式は、当時の絵本や絵入り狂歌集に多く見られるが、本書の形式は特に、鈴木春信の狂歌絵本と類似している。本書の江戸における板元である山金堂は、明和年間(1764-1772)に鈴木春信による俳諧や狂歌を添えた絵本を独占的に多数刊行している²⁸が、特にそれに類似した形式である²⁹ことから、本書の制作に、板元の山金堂も関与していたことが考えられる。

また、下巻には奇品鼠を詠んだ狂歌が賛としてそえられている。これらの狂歌の作者は、当時大坂で活躍していた狂歌師、一本亭芙蓉花(1721-1783)と一本亭社の門人たちである。また、『養鼠玉のかけはし』以前に一本亭芙蓉花が編纂した絵入りの狂歌集『狂歌拾遺家土産』(宝暦8年[1758])は柏原屋佐兵衛が開板出版していることから、柏原屋と一本亭芙蓉花との関係を指摘できる。

本書は、作者である春帆堂(春木幸次)が和泉屋に出版を依頼した飼育書であり、和泉

屋を中心に制作されたものである。本書は、鼠の飼育書として制作された一方で、当時の流行絵師や彫師、狂歌師がかかわり、絵本の要素も持っているという特徴を持っている。

3-2. 『養鼠玉のかけはし』の内容

3-2-1. 『養鼠玉のかけはし』の鼠

本書は、上巻と下巻で内容が分かれている。上巻は鼠とその仲間についての解説である。「鼠」から「鼯鼠（和名：むささび）」まで23種類の鼠とその仲間について解説をしている。「今本草に載る所の種類を記すると。」とあり、李時珍の『本草綱目』の「鼠類」から引用し、さらに『本草綱目』には記載のない「香鼠（俗にいふ麝香鼠）」を加えている。また、「鼯鼠（俗に云うころもち）」と「鼯鼯（和名のらこ。俗に云。はつかねつみ）」の内容については、『本草綱目』には依らず、寺島良安の『和漢三才図会』³⁰（正徳2年[1712]）の記述を引用している。

本書において、飼育愛玩の対象となっていた鼠がラットであるかマウスであるかは明確ではないが、下巻において、愛玩の対象とする鼠は「常の鼠」であるとしている。また、上巻において、鼠は家につく害獣として、「其害すくなからず。」としている。そして、この害獣とされる鼠を愛玩動物としてもてあそんでいたことについて、天下太平の世においては、人々の興味が金魚や小鳥、植物に移り、鼠も同様に愛玩の対象となったと述べている。さらに、作者である春帆堂は白鼠を愛玩するうちに、様々な毛色の鼠が出来、これを楽しむ内に、最近は頗る奇品を得たとしている。続けて、「凡単に鼠といふは家鼠なり。」としている。これらのことから、本書で取り上げている「常の鼠」とは、家にすむ鼠であり、ラットとマウスの両方が考えられる。

本書においては、ラットとマウスの区別は明確ではなく、どちらかに断定することはできないが、鼠に大きな鼠と小さな鼠が存在していたことは意識されていた。上巻の鼠の仲間の解説の中で、「常の鼠」と区別して、「鼯鼯（和名のらこ。俗に云。はつかねつみ）」のことを『和漢三才図会』を引用して、大きさ二寸におよばず、また家鼠の子が巣を出て20日たったものとは異なるものであり、小さいことから「はつか」と呼ぶと述べている。『和漢三才図会』における「鼯鼯（はつか・のらね）」は台所に出現して、米糠を食べるものであるとされることから、現在のハツカネズミを指すといわれる³¹。『和漢三才図会』に依っている本書においても、同様にハツカネズミ（マウス）を指しているといえる。「常の鼠」と区別して小さい鼠を「はつかねつみ」と呼んでいたことから、「常の鼠」は大きな

鼠であるところのラットを指しているといえる。本書における愛玩の対象の鼠は「常の鼠」と記されることから、本書における飼育愛玩の主な対象となっていた鼠はラットであったといえる。

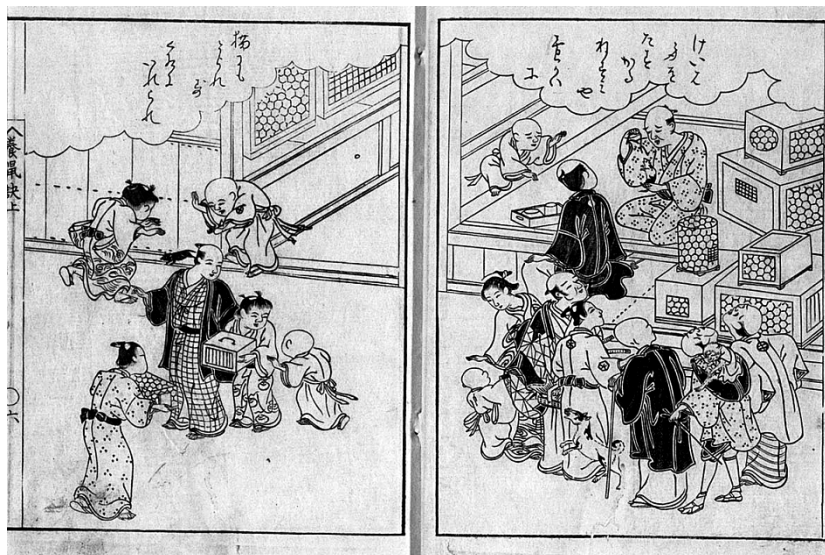


図1 鼠を扱う店の様子『養鼠玉のかけはし』上巻五ウ・六オ

3-2-2. 鼠飼育の目的

下巻では、よい鼠の選び方や繁殖のさせ方、飼育籠についてなど飼育方法を中心に解説し、さらに当時もてあそばれていた奇品5品種を紹介し、また巻末に奇品鼠を取り扱っている5店舗の住所を記載している。

飼育方法については、食べ物や飼育籠の大きさなど、飼育の基本的な事柄が説明されている。鼠を馴らすことについては、以下のように述べ、鼠をなつかせ、芸を仕込むことは、食べものを与えることで覚えるものではなく、何かの拍子にできるものであるから、小さい頃より養うことで人に馴れさせ、芸を教えるべきであるとしている。

鼠を馴^{なつ}事^{こと}は。さして伝^{でん}あるにあらず。鼠^{ねずみ}の性^{せい}疑^ぎ多^たきものゆへ。一通^とり食物^{じよくもつ}などにて狎^{なる}ものにあらず。畢竟^{ひつきやう}は拍子^{ひやうし}もの也。今菓子売^{くはしうり}などの札^{ふだ}をくはへさせ。或^{ある}は放^{ほう}下^か師^しの井^いをくまするたぐひは。こころながくその事^{こと}になれさす也。因^よていつとなく。其物^{そのもの}にあへは其物^{そのもの}につかはる也。(中略) 大方^{おほかた}は目^めのあかぬうちより。養^{やしな}ひ玩^{もてあそ}びてとくと人^{なれ}嫌^{きら}むるにあらざれば。なつけがたき事^{こと}なり。

また巻頭においては、「よく養^{やしな}ひ得^えては。人^{ひと}の言^{こと}をわきまへ。井^いをくみ。文使^{ぶんつかひ}のさま。や

さし。」として、鼠を飼育することは、鼠に芸を仕込むことに、愛玩する楽しみがあるとしている。挿絵にも、鼠販売店の主人が斑鼠の芸を見せているところが描かれている(図1)。芸に用いる小道具が描かれており、鼠の芸を楽しむために鼠を飼育愛玩していたことが考えられる。

3-3. 養鼠と養鼠家

『養鼠玉のかけはし』には、鼠を飼育することは「養鼠」、飼育愛玩している人物については「養鼠家」という言葉が用いられている。本書の作者もこの「養鼠家」であり、日頃白鼠を愛玩しているうちに、奇品鼠を手に入れたと述べている。

本書が読者として対象としている人物は鼠飼育の初心者である。「絵にまじへて。おさないの見やすからんずことをほりす。一応^{およそ}これをもてあそばんとならば。先^{まづ}此書^{このしよ}に就^{つい}て其^{やしな}養ふみちをかふがえ。やうやうに^{このしよ}此書をはなれて。」としている。また、鼠を扱う店先を描いた挿絵(図1)にも鼠を買って帰る子供が描かれている。本書が刊行された時期には白鼠が、子供の愛玩物となっていたことから、本書の読者として子供が想定されていたことが考えられる。しかし、子供たちをはじめ、本書の読者である鼠飼育の初心者が飼育愛玩していたのは、手に入れやすくなっていた白鼠が中心であったと考えられる。この白鼠は、本書において、白鼠の上品ではあるが、奇品とはされない眼の赤い白鼠、アルビノのラットやマウスであったと考えられる。

他方、下巻で紹介されている奇品の斑鼠などは子供たちが簡単に手に入れることができるほど身近なものではなかったと考えられる。これらの奇品を飼育愛玩していたのは養鼠家と呼ばれる好事家たちであった。

作者である春帆堂もまた、このような養鼠家であり、同じ趣味を持つ養鼠家たちは情報交換を行っていた。本書の出版については、「暇日^{いとまのひ}ひろく同好^{どうこう}に謀^{はかつ}て。養鼠^{ようそ}の一卷^{いつくわん}をつづりて。我^{われ}に求^{もと}むるの勞^{らう}に代^{かへ}んとす。」と述べており、春帆堂のもとへ鼠を求めて来る者が多かったことがわかる。養鼠家は同好の者たちと情報交換や奇品鼠の取引などを行っていたと考えられる。巻末で紹介されている鼠品売買所は白鼠の販売を行うだけでなく、このような養鼠家どうしの情報を共有する場所であったとも考えられる。本書にあげられている奇品鼠は全て値段を決めて販売していることが巻末に述べられている。その商う店は多いが、巻末に載せている店に行けば必ず買うことが出来るとしており、さらに、「奇品^{かはつたしな}を獲^えば。此^{みせ}売買^{むかひ}舗^{あたい}に向^{きだ}て。其^{あたい}価^{きだ}を定^きむべし」としている。このような鼠販売所は奇品鼠

についての情報を交換する場でもあったことを示している。「大坂鼠品売買所」として以下の5店舗が揚げられている。

- | | |
|-----------------|--------|
| ・心齋橋筋大宝寺町西北角 | 十島屋仲七 |
| ・さのや橋筋安堂寺町南入東側 | 本屋宇八 |
| ・さのや橋筋順慶町北よこ町西側 | 河内屋虎之助 |
| ・同所 | 播磨屋幸助 |
| ・内本町御稜筋東 | 和田清左衛門 |

5店舗のうち、4店は南船場にあり、1店は島之内にある。どの店も南北に通る筋に面していることから、大店ではなく、小売の小さな店であったといえる。小間物などを扱う店であったり、飼育籠を扱う籠屋で鼠を扱っていたと考えられる。また、どの店も心齋橋筋または佐野屋橋筋上にあり、作者である春帆堂の住む松原町の近所である。本書に記されている奇品はすべてこれらの店で手に入れることができるとあることから、どの店も本書の作者である春帆堂と鼠の取引に関して何らかの関係を持っていたといえる。養鼠家たちは鼠販売店や同じ養鼠家たちと情報交換などを行い、そのような中で、新しい奇品を手に入れたり、鼠の交換や売買を行い、様々な奇品が作り出されていたと考えられる。

3-4. 奇品の種類

奇品とは、珍しい物に対して用いられる言葉であるが、当時流行していた、矮小であったり奇形であったりする園芸植物や斑入り植物に対しても用いられていた言葉である。斑入園芸植物を集めた園芸書『草木奇品家雅見』³²（文政10年[1827]）には、珍しい種類の様々な斑入り植物が奇品として、作り出した人物と共に紹介されている。『養鼠玉のかけはし』における「奇品」もまた、園芸植物と同様に白黒の斑模様の鼠や、珍しい毛色を持った鼠を指している。

本書で紹介されている奇品鼠は「熊鼠」「豆鼠」「斑鼠」「狐鼠」「とつそ」の5種である（表1）。また、白鼠の中でも眼の黒いものは奇品であるとしている。豆鼠は大きさが「一寸許」（約3センチメートル）とあることから、現在ジャパニーズファンシーマウスと呼ばれる矮小マウスと考えられる。また、豆鼠が2種類あるとしていることは、マウスと矮小マウスを指していると考えられる。「熊鼠 同斑」の挿絵をみると、多少の誇張があるにしても、豆鼠を矮小マウスと、熊鼠をラットとみることができる³³。さらに、斑鼠に関してみれば、熊鼠の斑鼠「同斑」と、「斑鼠」、「豆ノ斑」の3種類が描かれている。それぞれ、

ラット、マウス、矮小マウスの斑鼠を指しているともみることができる。本書では、ラットとマウスの両方の奇品を紹介していることがいえる。

これらの鼠はすべて大坂や近郊の個人の家より産出していることから、養鼠家の個人的な興味によって作り出された品種であるといえる。また、それぞれ明和年中に産出したとあることから、明和年中の白鼠愛玩の流行の中で、白鼠を愛玩していた養鼠家によって奇品鼠は初めて作り出されたことがうかがえる。さらに、斑鼠は大坂のある養鼠家が値を費やして奇品をもてあそんでいるうちに初めて出来たものであると述べられていることから、奇品を愛好していた養鼠家は、ある程度の資産を有していた人物であり、鼠の飼育を個人的に楽しんでいた好事家であったといえる。

また、本書で紹介されている奇品は、次の2種類に分けられる。

- ①毛色の珍しいもの：熊鼠、斑鼠（斑、はちわれ、鹿の子）、狐鼠
- ②形や大きさの異なったもの：豆鼠、とつそ





これらの奇品は、天明7年（1787）刊行の飼育書『珍翫鼠育草』に紹介されている鼠とは異なる品種である。『珍翫鼠育草』には斑鼠などの毛色の変化したものと豆鼠は紹介されているが、「とつそ」の様に外観が変形しているものは紹介されておらず、斑鼠でも、珍しいといわれていた「はちわれ」と「鹿斑」も見られない。『養鼠玉のかけはし』刊行当時には、多様な種類の奇品が作り出され、愛玩される中で、その品種を維持することが難しい奇品も存在していたといえる。

『養鼠玉のかけはし』では、奇品鼠について、以下のように述べている。

世に奇品の鼠の出るを。たとへば白鼠に熊鼠を合す時は。生ずる所を斑鼠なりとおもふは非なり。奇品の出るのは別の事にて。必ず自然にまかせたるものなり。右のごとく毛色の異なるを合して生ずるを。養鼠家にて土鼠と称じて下品とす。奇品の出る事は。人間の伎倆にあらず。造化の不測なり。さればとて価を費して珍重せり。いつまでも白は白。斑はまだらを偶して。勢の奇遇と。欣賞のやんごとなきに感じて。はからざるに。奇品の出る事。従来見及べり。是養鼠家の所謂せうねならずや。

作者の春帆堂は、奇品を作り出す行為は自然に任せることで、造化の不測であるからこそ値を費やすものであると説いている。鼠の毛色から判断して故意に掛け合わせを行わないことが養鼠家のあるべき姿であるとしている。春帆堂のこの主張は、奇品の産出において実際には養鼠家たちが様々な毛色の鼠を掛け合わすことを試みていたはずであることに鑑みれば、特異な考えであったといえる。

表1 『養鼠玉のかけはし』の奇品鼠

奇品鼠とその名称	特徴	産出年	産出場所
 熊鼠 同斑 熊ノ豆鼠	惣体純黒にして熊のごとく胸に月の輪あり。	明和年中	京師高倉辺り
 豆鼠 豆ノ斑 白ノ豆	凡曲尺にて一寸許あり。但し二種ある。		天満辺り
 斑鼠 はちわれ 鹿	白黒のまだら。はちわれは頭より半身白黒とわかれたる也。鹿まだらは大鼠にして鹿のごとき文あり。	明和年中	大坂或養鼠家
 狐鼠	腹白く尾みじかく。狐色。玉子色。薄赤。藤色。かはらけ色などあり。		
 とつそ	長短く。尾みじかく。面まるく。耳小さく。背まるし。毛あらくして鳴声ちつちつといふ。	近世	摂州今宮辺り

3-5. 『珍翫鼠育草』の奇品

『養鼠玉のかけはし』の刊行から12年後の天明7年(1787)に刊行された『珍翫鼠育草』(定延子序、京都銭屋長兵衛板)は一冊の小本の冊子である。前半では、白鼠の伝来と飼育方法について述べ、後半部に「鼠種取様秘伝」として、かけあわせによる品種の作り方を載せている。作者および序を書いた定延子については不明であるが、板元が京都であることから、上方の養鼠家であると考えられる。白鼠の伝来の後半部分、白鼠の富貴性を示すくだりは、『養鼠玉のかけはし』とほとんど同一の記述であることや、月輪の熊鼠を描いた「同月の熊」の挿絵は、『養鼠玉のかけはし』の「熊鼠」を反転したものであることから、『珍翫鼠育草』は、先に刊行された『養鼠玉のかけはし』の影響を受けて制作されたものであるといえる。『珍翫鼠育草』における鼠は、Tokuda(1935)³⁴により、マウスと紹介され

で以来、マウスの飼育書であるとされてきているが、ラットの可能性も指摘されている³⁵。取り上げられている鼠がラットであるか、マウスであるか明確ではないが、『養鼠玉のかけはし』の影響を受けていることや、対象となっている鼠は「鼠」とのみ記載されていることから、マウスに限定しているとはいえないと考えられる。

『珍翫鼠育草』に紹介されている奇品 15 品種は、「ぶち、熊ぶち、ふじ（藤色）、妻白（黒色）、くぐり（黒色）、頭ぶち、藤の筋、むじ（黄色）、とき（鶉色）、あざみ（薊色）、月のぶち、豆ぶち、目赤白、すじ、黒眼の白」である。全て、斑の入り方や、毛色の変化を表した名称であり、『養鼠玉のかけはし』では「斑鼠」とされていたものが細分化された表現である。

これらの奇品鼠を手に入れるための方法は、「鼠種取様秘伝」によれば、白鼠に黒ぶちの鼠をかけあわせることなどであり、『養鼠玉のかけはし』では「養鼠家の性根」ではないとされた、毛色の異なる鼠を交配させることである。このような鼠は『養鼠玉のかけはし』では「土鼠と称して下品とす」るものである。

また、「鼠種取様秘伝」の末に、「毛色かわりし鼠には種取んとおもはば芸はあしく 芸付候はは種は取事あしく」という記述がある。『養鼠玉のかけはし』刊行当時は鼠を飼育する目的の中に、鼠に芸をさせて楽しむことがあげられていたが、『珍翫鼠育草』では、より珍しい毛色の鼠を手に入れようとすると芸の覚えは悪く、芸を覚えさせようとすると子供を取ることが難しいとしており、芸を目的として愛玩することは、奇品を得ることの妨げとなるという指摘である。奇品を得ることを目的とする場合には、『養鼠玉のかけはし』においては、飼育目的でもあった、鼠に芸を仕込んで愛玩する行為は鼠の飼育目的ではなくなっているのである。これらのことをみれば、『珍翫鼠育草』における鼠飼育と奇品の産出に関する考え方は、先行する『養鼠玉のかけはし』における飼育の在り方とは異なり、奇品を産出し、その品種を維持することに力が注がれているといえる。

4. 『養鼠玉のかけはし』と狂歌師

『養鼠玉のかけはし』には、一本亭芙蓉花とその門人の狂歌が賛として添えられている。（表 2）また、上巻には、「鼠の嫁入り」を描いた挿絵の後に芙蓉花の作である「鼠の嫁入り」を詠んだ狂歌が載せられている。下巻には「白鼠」の図の賛に白鼠を詠んだ芙蓉花の狂歌が賛として添えられているほか、奇品鼠の図の上に、一本亭社の門人の作である、それぞれの奇品を詠んだ狂歌の賛が添えられている。本書は、飼育書でありながら、一本亭

社中の狂歌選集とも見ることができる。

一本亭芙蓉花は、当時の上方狂歌三派（栗派、丸派、一本亭社）の一つである一本亭社を率いていた狂歌師であり、大坂をはじめ諸国に100人以上の門人を有していた。上方狂歌の大衆化が進む時代において、正統的な狂歌を目指していた狂歌師であった³⁶。大衆化への対応として、俳諧師の蕪村一門との交流を行っていた。

一本亭芙蓉花は、安永2年（1773）以降、俳諧師の吉分大魯の門に入り俳諧にも親しみ、蕪村とも交友関係にあった³⁷。安永2年（1773）10月21日の大魯宛の蕪村の書簡には、大魯の俳諧集「あしのかげ」を出版する際の跋文について、序文は一本亭が書いたことを聞いたが、一本亭は狂歌の先生であるから、自分の序の次にあってもよいということを述べた上で、「畢竟、一本亭の御せわの事に候故、随分可然候。」としている³⁸。安永3年（1774）頃には大魯の俳諧集の出版や大魯自身について一本亭芙蓉花が深く関わっていたことが見てとれる。この時期には大魯を通して蕪村と知り合い、芙蓉花の門人たちも蕪村の句集に俳句を寄せるなど、狂歌にとどまらない文人活動を行っている。『養鼠玉のかけはし』は、芙蓉花の狂歌以外の文人活動が盛んであった時期において制作されている。

一本亭社の一門の狂歌選集は安永9年（1780）の『狂歌両節東街道』と翌年の天明元年（1781）に刊行された『狂歌五題集』のみである。それ以前に芙蓉花は5冊の狂歌集を出版しているが、宝暦3年（1753）に刊行された『狂歌拾遺家土産』が、油煙斎（鯛屋）貞柳の狂歌を編纂したものであるように、全て過去の狂歌師の狂歌を編纂した狂歌集であった。他の狂歌の一派が一門選集を出版している時期、芙蓉花が一門の狂歌選集ではなく、貞柳らの狂歌集を出版したことは、蕪村一門の蕉風復興運動にも類するものであり、大衆化に対する行動であったといわれる³⁹。

『養鼠玉のかけはし』下巻にあるそれぞれの奇品の図には賛として、春柳、守由、朶雲、松花、呉山の狂歌が載せられている。彼らは一本亭社一門の選集『狂歌両節東街道』、『狂歌五題集』に歌を載せていることから、一本亭社の月並狂歌会に参加していた常連の門人であるといえる。中でも、高井守由と小出朶雲は『狂歌両節東街道』に跋文を、平山呉山は『狂歌五題集』に序文を載せていることから、これらの人物は、一本亭社の中でも中心的な門人であったといえる。一本亭社を構成する常連たちが本書に載せられた狂歌の制作にかかわっていたのである。

本書において奇品鼠の図に添えられている狂歌の賛には、すべてそれぞれの奇品鼠の名称が詠み込まれるだけでなく、その鼠の珍しさや高価さが詠み込まれている。熊鼠を詠ん

だ歌では、鼠の芸の一つである「輪抜け」をする鼠の様子を詠んでおり、実際に芸をする鼠を目の当たりにして狂歌を詠んだと考えられる。一本亭社の主要な門人であった狂歌師たちが集まって、養鼠家たちの奇品鼠の品評会と同時に、狂歌会を催したと考えられる。

資産を有し、狂歌以外の活動にも興味を持ち、積極的に行っていた一本亭芙蓉花や彼の門人の狂歌師が、同じように裕福な人物の趣味である奇品鼠の愛玩や同好会に顔を出した可能性を本書から読み取ることが出来る。『養鼠玉のかけはし』の刊行にかかわり、一本亭社中の常連の作品を載せたことは、狂歌活動における一本亭芙蓉花の新しい試みの一つであったといえる。

表2 『養鼠玉のかけはし』中の挿絵と狂歌

巻	丁	図	狂歌など	作者	一本亭芙蓉花との関係
上	乙オ	(鼠を肩に乗せる唐子)	-	-	-
	乙ウ 2オ	(鼠の嫁入り)	-	-	-
	2ウ	-	よめいりもいづれ鼠はくちもとに ひげをはやして目出たかりけり	一本亭芙蓉花	-
	3ウ 4オ	(甲子大黒祭)	よねむなくにきはひわらふ家にこそ 福大こくやきのえ子まつり	-	-
	4ウ 5オ	(鼠芸の菓子売り と子供)	やうはりと鼠か札をくはゆれは 子供は菓子に心ひかるる	-	-
	5ウ 6オ	(鼠を売る店の店先)	けいは身をたすかるねすみや金かいに 猫にもとられすくらにいれられ	-	-
	6ウ 7オ	番人射隠鼠図	見則不祥黠之又黠 喟齊題		-
	7ウ 8オ	火浣布之図	日々新又日新 橐吾子題		-
下	1オ	(白鼠二匹)	はんしような家にはありとしる鼠 白ねすみとて用ひこそすれ	一本亭芙蓉花	-
	3オ	熊鼠 同斑 熊ノ豆鼠	芸のあるくまねすみなら月の輪の 輪ぬけやちうちうちかへりせむ	春柳	門人:(一向亭) 藤井浄鑑
	3ウ	豆鼠 豆ノ斑 白ノ豆	節分の夜に出るなら福はうち ふくはうちなるまめねすみ也	守由	門人:(一花亭) 高井守由
	4オ	斑 はちわれ 鹿	時しらぬそれは富士の根ねすみのね かのこまたらやたかく売らむ	朶雲	門人:(一封亭) 小出朶雲
	4ウ	狐鼠	いろいろにかはつた毛色あれはこそ こそこそ人にも見出されけり	松花	門人
	5オ	とつそ	処から今宮辺にでるとつそ えひすの福とおもひさふらぬ	呉山	門人:(一貫堂) 平山呉山

5. おわりに

鼠飼育は明和年間(1764-1771)に大坂で白鼠が大黒の使いとして、富貴をもたらすもの

として飼育愛玩がもてはやされる様になると、それまでは珍しかった白鼠の中でも、眼の赤いアルビノの白鼠は子供でも簡単に手に入る愛玩動物となった。さらに、養鼠家とよばれる個人の鼠愛好家の中で、個人的に斑鼠などの奇品とよばれる様々な毛色の品種が作り出されていった。白鼠飼育流行中の安永4年（1775）には大坂のある養鼠家である春帆堂（春木幸次）によって出版された『養鼠玉のかけはし』は、鼠飼育の初心者にむけて鼠の種類を紹介と飼育方法を解説した飼育書であるが、養鼠家たちが奇品の情報や販売についての情報を手に入れるための案内書でもあった。また、本書における鼠はラットとマウスの両方が考えられるが、飼育愛玩の対象として、大きい家鼠であるところの「常の鼠」を中心に記述していることから、特にラットを中心とした鼠の飼育書であると考えられた。

『養鼠玉のかけはし』は、後の『珍翫鼠育草』にも影響を及ぼした最初の鼠飼育書であり、上方における白鼠飼育の流行を支えた飼育書であるといえるものであった。しかし、奇品の産出に関しては、奇品の産出を奨励しながらも、故意に毛色の異なるものをかけあわせることには慎重な態度をとっていた。『養鼠玉のかけはし』が、奇品産出が流行となった時期において、新たな奇品の産出を望みながらも、その行為は自然の造化に背く行為であるとして警告している点は注目に値する。一方で、12年後に刊行された『珍翫鼠育草』は、より専門的なかけあわせについて解説しており、『養鼠玉のかけはし』の作者の意見は顧みられていない。故意にかけあわせを行うことで、奇品を産出することに主眼が置かれている。このことから、『養鼠玉のかけはし』は、奇品産出が広がり始めた時期における刊行であったため、人の手を加えたかけあわせに慎重な態度を取ったと考えられる。

『養鼠玉のかけはし』は、当時大坂で有名だった絵師や彫師が制作にかかわった書であり、江戸と大坂の三書肆合同の出版物であり、飼育書としてだけではなく、狂歌絵本としても楽しむことのできる特徴を持っている。さらに、鼠の飼育愛好家である「養鼠家」と狂歌師の一門との協同制作といえる特徴的な出版物である。本書に狂歌が寄せられていることは一本亭芙蓉花という当時有力な狂歌師の一門が養鼠家の情報網の中に存在していたことを示している。また、狂歌師も奇品鼠に興味を持ち、奇品鼠を対象に狂歌会が催された可能性を示している。当時有力だった狂歌師の一派と協同で絵本形式の飼育書を刊行することで、鼠飼育と奇品を普及させるという試みであったと考えられる。さらに、当時一本亭芙蓉花は俳諧活動など他の文人活動にも積極的であったことから、一本亭社の宣伝目的として流行の奇品鼠品評会が狂歌会に取り入れられたとも考えられる。上方狂歌の大衆化に対抗していた一本亭芙蓉花とその門人が、流行の鼠飼育の飼育書制作にかかわってい

たことに、当時の大坂における文人たちの活動と交流の一端を見ることが出来る。

奇品は動物だけでなく、18世紀後半から主に19世紀の園芸植物の流行においても、特にもてはやされていたものであり、19世紀の江戸においては、狂歌師と奇品植物愛好家の連が共同で図譜の制作を行うこともあった。18世紀の大坂における鼠飼育と狂歌師との関係と、それ以後の園芸植物の奇品と狂歌師との関係にどのようにかかわっているのかということについては今後の課題としたい。

注

¹ 例えば、『春日権現験記絵』（延慶2年[1309]）には、鳥籠には多数の鳥が描かれていることから、当時の愛玩動物の様子がみえる。

² 細川博昭（2006）大江戸飼い鳥草紙 江戸のペットブーム、吉川弘文館。塚本学（1995）：江戸時代人と動物、日本エディタースクール出版部、217-228。

³ 小野佐和子（1985）：江戸時代における園芸植物の流行について、造園雑誌 48(5)、55-60。

⁴ 平野恵（2006）：十九世紀日本の園芸文化、思文閣出版。

⁵ Jonathan Burt (2006): Rat: Animal series, Reaktion Books ltd, 130-134.

⁶ Tsuyoshi Koide, et al. (1998): A new inbred strain JF1 established from Japanese fancy mouse carrying the classic piebald allele, *Mammalian Genome* 9, 15-19.

⁷ 香川大学図書館神原文庫蔵[489.49] 上野益三（1982）：博物学短編集上：江戸科学古典叢書 44、恒和出版、101-145。

⁸ 徳田御稔（1936）：珍本「珍玩鼠育草」の紹介、科学知識 16(1)、71-73。寺島俊雄（1992-1993）：ミュータントマウスを愛玩した江戸の粋 その一～その三、ミクロスコピア 9(3,4), 10(1)。金子之史（2002）：『珍玩鼠育草』シリーズ・香川大学の貴重図書 22、香川大学附属図書館報 35、2-8。

⁹ 国立国会図書館蔵[W395-5]

¹⁰ 大野瑞絵（2009）：ペットガイドシリーズ ザ・ネズミ マウス・ラット・スナネズミ、誠文堂、210-217。

中野三敏（2009）：和本の海へ 豊饒の江戸文化、角川書店、24-27。に紹介される。

¹¹ 飯島忠夫他校訂（1942）：町人囊・百姓囊・長崎夜話草、岩波書店、p206。

¹² 長谷川恩（1979）：ネズミと日本文学、時事通信社、201-206。

¹³ 宮田登（1993）：江戸のはやり神、筑摩書房、116-118。

¹⁴ 芸能史研究会編（1977）：芸能記録：日本庶民文化史料集成 第13巻、三一書房。

¹⁵ 彌永信美（2002）：大黒天変相、法蔵館、343-344。

¹⁶ 長谷川強他校訂（2009）：嬉遊笑覧（五）、岩波文庫、94-95。

¹⁷ 香川大学図書館神原文庫蔵[489.49]

¹⁸ 森銃三他編（1981）：随筆百花苑第十四巻、中央公論社、p75。

¹⁹ 同上、p129。

²⁰ 東北大学狩野文庫蔵[01-001129]

²¹ 大阪府立中之島図書館（1992）：大坂本屋仲間記録 第17巻『開板御願書扣』、清文堂、p231。

同（1998）：大坂本屋仲間記録 第14巻『新板願出印形帳』、清文堂出版、p60。より

²² 観我生は『養鼠玉のかけはし』の序文を書いた人物である。本文を書いた春帆堂主人と同一人物であるかは不明である。

²³ （1980）：江戸本屋出版記録 上巻、ゆまに書房、p625。

²⁴ 大阪府立中之島図書館（1988）：大坂本屋仲間記録 第14巻『新板願出印形帳』、清文堂出版、p60。

²⁵ 浅野秀剛（1984）：橘守国とその門流（中）、浮世絵芸術 83、13-17。同（1985）：橘守国とその門流（下）、浮世絵芸術 84、11-15。

²⁶ 近衛典子（2002）：高安蘆屋をめぐる諸問題—藤井紫影氏旧蔵『万句集』を起点として—、駒澤國文 39、51-68、p64。

²⁷ 日野原健司（2008）：大坂画壇胎動期の出版技術—橘守国『運筆篋画』とそれを支える彫師、美術フォ

ーラム 2 1 17、34-39.

²⁸ 藤澤紫 (2003) : 鈴木春信絵本全集 研究篇、勉誠出版、p143-147.

²⁹ 中野前掲、p24. においても類似点が指摘されている。

³⁰ 遠藤鎮雄編 (1980) : 和漢三才図会 : 日本庶民生活史料集成 第 29 卷、三一書房.

³¹ 長谷川恩 (1996) : ネズミと日本人、三一書房、p8.

³² 近世歴史資料研究会訳編 (2008) : 園芸Ⅱ : 近世歴史資料集成 第 5 期第 8 卷、科学書院.

³³ 磯野直秀 (2002) : 日本博物誌年表、平凡社、p341. では「鼠」をラット、「豆鼠」をマウスとして、『養鼠玉のかけはし』をマウスとラットの飼育書としている。

³⁴ Mitoshi Tokuda (1935): An Eighteen Century Japanese Guide-Book on Mouse-Breeding, *The Journal of Heredity* 26(12), 480-484.

³⁵ 芹沢忠夫 (2002) : 「珍頑鼠育草」の鼠はマウスかラットかネズミか、第 76 回関西実験動物研究会、p23. において、ラットの可能性が示唆されている。

³⁶ 西島孜哉 (1990) : 近世上方狂歌の研究、和泉書院、40-43、349-373.

³⁷ 穎原退蔵 (1979[1923]) : 一本亭芙蓉花、穎原退蔵著作全集 13、中央公論社.

³⁸ 大谷篤蔵・藤田真一校注 (1992) : 蕪村書簡集、岩波文庫、52-55.

³⁹ 西島前掲、362-364.

図版出典

図 1 : 国立国会図書館電子展示会「描かれた動物・植物-江戸時代の博物誌」より転載

(http://www.ndl.go.jp/nature/img_1/004/004-01-0091.html)

表 2 中の図 : 同上

(http://www.ndl.go.jp/nature/img_1/004/004-02-0041.html,

http://www.ndl.go.jp/nature/img_1/004/004-02-0051.html,

http://www.ndl.go.jp/nature/img_1/004/004-02-0061.html)